

ボランティア団体「にゃんこおたすけ隊」



死生観について語るとき、それは必ずしも「ひと」に限定しないはず。

身勝手に奪われる命がない世界、動物と人とのより良い共存、「命とは」といった、単純に答えにたどり着けない問題に青春を捧げる学生たちがいる。

草津市拠点の高校生が主催するボランティア団体「にゃんこおたすけ隊」は、野良猫や捨て猫の保護および里親探しから、動物愛護の啓発・TNR活動・保護猫の一時預かりなど多様な活動に日々奮闘中。

「起きなくていい不幸をひとつでも無くすために、今できることを精一杯やるだけ」代表の鎌田優花さんの視線は強く真っ直ぐ前を見据えている。

2021年10月26日取材

Q: にゃんこおたすけ隊を始めたきっかけを教えてください。

自分自身が保護猫を家で飼いだめたことが、そもそものきっかけです。

「殺処分」という言葉への疑問からいろいろと調べていくうちに、飼い主のいない猫や犬たちが、知らないところで処分されていることを知り、この現実を変えることはできないだろうか、何か自分にできることはないだろうかと考え、この団体を立ち上げ活動を始めました。

まずは身近なところで見つかる猫の様子を見たり保護したり、他の団体主催のイベントスタフとしてボランティア参加し、活動内容や現状について学びました。

その後も大人のボランティアさんと相談し協力しながら、手探りで活動していくうちに、それまでの活動で知り合った譲渡先のご家族さん、学校の同級生など多くの人が活動に賛同してくださって、気がつけば仲間が増えていたという感じです。

Q: どのような活動をされているのですか？

学校からの帰り道には2〜3件の現場に立ち寄り、地域猫たちを確認して帰るようになっています。

これはTNR活動(Trap/捕獲・Neuter/不妊去勢手術・Return/元の場所に戻す)後の見回りも兼ねています。

TNR活動は基本的に金曜日の放課後に

捕獲(T)して土曜日に手術(N)、そして日曜日に戻す(R)というサイクルです。基本的には週1回から2回ほど行います。TNR活動は手術をして終わりではありません。TNR後の猫には手術済みの印として耳カットをして、その後の見回りも行っています。

保護活動については依頼があった時に都度動くというスタイルで、だいたい1ヶ月に10回ほどの保護があります。保護する猫はTNR活動から負傷や病気などでリリースが難しい猫が半分、その他飼育放棄や多頭崩壊などの依頼でレスキューすることが多いです。

ほかには毎週日曜日に譲渡会のイベントや、メンバー各自によるSNS発信なども定期的に行っています。

譲渡会は自分たちが主催で行うことも、他のイベントで自分たちのブースを出したりすることもあります。

Q: 活動に向ける思いを聞かせてください。

イベントの開催や手術費用など、活動には手間と時間とお金がかかります。

日頃から活動についてこまめにSNSやイベント会場で発信し、まず活動の必要性を知っていたら努力をし、その上で応援したいと思ったださる方からの募金や支援金、チャリティグッズを販売した収益を活動費用に使っています。

また、高校生が自分たちの活動について発信するボランティア大会に積極的にエントリー

してグランプリを目指し、その賞金をまた次の活動につなげていく挑戦もしています。

「学生だからできること、学生にしかなできないこと。私たちだからできること、私たちにしかできないことを全力で」をモットーに、全力で命に對して取り組む姿勢を心がけて活動していますが、これまでに助けられなかった命もあり、無力感を感じたり歯がゆい思いもしてきました。

一方で里親になってくださった方から、その後の幸せそうな報告をいただいた時には、命を継ぎあげられたこと、新しい家族と繋がれたこと、その架け橋として存在できる喜びが満ちて、それはとても大きなエネルギーになっています。

Q.活動していく中で苦悩されることはありますか。

自分たちの話を聞いてもらうためにはまず、相手の話を聞き気持ちを知ることからだと思います。

私たちが猫を好きだから全員に好きになつてというわけではなく、私たちが猫を好きだと思ふのと同じようにやつぱり嫌いだと思ふ方もいて、またそれには理由もあります。そこで対立するのではなく、私たちの意見を理解してもらおうと思つたら、先に相手の方の意見を理解するつていうところかなと思つるので、依頼現場とかで猫ちゃんのことを嫌いな方とかにきついことを言われた時とかは、何でそういう風に見えるのかとか、どうしてほしいと望んでおられるのか、猫による被害はどのようなものがあつて迷惑

したのかをしつかりと聞き、その方と私たちの意見と折り合いをつける場所がないかなとかいう風に、嫌いな方の意見に二つ共感してみたりしながら、ある程度の後、折り合いがつけられるところを探りつつ意見交換させてもらうようになっています。

でも高校生だからというだけで最初から話を聞いてもらえなかったり、適当にあしらわれたりすることも現実にはあります。

そういう時は関わりのある信頼できる大人のボランティアさんや県の動物愛護推進員の方に頼つて、一緒にお話させていただくようにしています。

Q.保護の依頼があつた時の具体的な動きを教えてください。

依頼件数はすごく多いため、すべての依頼を受けることは団体の崩壊にもつながりかねないので、できないのが現状です。わかつてもらつた上で活動に入るのはいんですけど、(猫が)嫌いだからじゃあよろしくと言われて、私たちが引き受けていたやつぱり「何でも屋」になつてしまうので、それにはならないようにしています。

緊急性の高い案件から着手していくのですが、保護の丸投げでなく依頼者さんと一緒に協力して保護活動をするというところから説明させていただき、理解を得た後に相談しながらその後のスクジュールを立てていきます。

依頼理由もさまざまで、「増えすぎて困つている」「飼い猫を手放さざるを得なくなった」

「捨て猫を見つけたが何とかならないか」など状況もいろいろです。

多頭飼育崩壊の現場では近隣の方から匂いや騒音の相談も多く、まずは現場の確認と地域住民からのお話を聞きに直接出向きます。

近隣の方々のお話を伺う一方で、当事者の方にもお声掛けさせていただき、心を開いていただけるようあわてずゆつくり対話しながらまずは親交を深めるところから始め、一緒に考え解決できる方法を探っていくように努力しています。

頑なな態度の方でも自分たちが高校生だからこそ、受け入れてもらいやすいところがあるのかもしれない。

あえて初めから多頭飼育崩壊については触れず、お互いの猫好きで心の共有から始め、打ち解けた先に本音で語れることがあると思うので、それまでは気長に「猫友」として交友を深めていく最終的に二緒の問題に取り組めるような流れを作るようにしています。

実際は当事者の方もどうすればいいか分からず戸惑っているうちに、困難な状況に陥つてしまっているパターンが多く見受けられます。当事者の方に話を聞いていくと、「正直ちよつと困つてる」とか、「近所の方からいろいろ言われてすごく嫌だつた」とか話をしてくださつたりするので、「じゃあ一緒にどうですか？良かったら協力しようか？」という風に言つたりすると、意外と「じゃあお願いしようかな」とか「一緒にやりたい」「こういう方と出会えて良かった」とつていう風に言つてくださることが多いです。多頭崩壊をおこしたくておこし

ている方はいませんし、餌やりさんはボランティアの敵ではなく重要な協力者です。

過去の現場では、当事者さんと半年にわたって交友を深めた後にやっと活動に入れたものの、頭数が多すぎて猫たちの状態が良くなかったり捕獲が難しかったことがあります。依頼者さんや当事者さんとの関わり方も含め、そこでの経験が今の活動に大きく影響しています。

まずは寄り添ってお話を伺うことが情報収集になり、現場の猫たちの保護やTNR活動の計画も立てやすくスムーズに進むことを学びました。

当事者さんの理解が得られたら手術の予約、捕獲器やキャリーの準備、捕獲した翌日の手術となりその後は元の場所に戻します。

他の団体と違ってシネターなどがないので、怪我等などすぐに戻せない猫については預かりをしてくれるメンバーや協力者さんの元で一時保護しつつ里親さん探しもしています。

Q: 活動の中では様々な辛いこともあったでしょう。

団体を立ち上げて以降、見送った猫ちゃんもたくさんいます。

乳飲み子と言われるまだ目も開かない猫ちゃんを見送る時は言葉にならない気持ちで、慣れるものではなくまた慣れてはいけないとも思っています。

たとえ2週間でも確かにここに存在していたという事実を残したくて、写真やSNSでの発信によつて見てくださる多くの人の心に命の大切さ

とともに生きた証が刻まれるといいなと願っています。

またそれによって生きることや死について考える機会になるのではないのでしょうか。

病気によって衰弱していく様子を見ているのは胸が痛みますし、治療することが本当の幸せになつているのか、どこまでなら手を差し伸べてあげて良いものかといった「正解」の見つからない問題にぶつかって、迷い悩むこともあります。

でも、命と向き合うことを選んだからには、その時の最善の判断とできる限りのケアをすること、できれば病気を治してあげたいし、もし力が及ばなかったとしても最後まで寄り添ってきちんと見送ってあげたいと思っています。

Q 広く多くの人に伝えたいことはありますか？

「高校生の可能性」について、もつと知ってもらいたいという思いがあります。

この団体を立ち上げる時、ほとんどの人に反対されました。

「大人がやつても大変なこと、高校生が遊び半分でするもんじゃない」など厳しい声もありました。

でも高校生でもここまでできる、できないことの羅列ではなくできること探しから始めれば、小さくてもたくさんあるのです。小さな力は大きな一歩に必ずつながります。

そういう挑戦する学生やそれを応援する大人が、もつと増えたらいいなと思います。

また活動していて痛感する命の大切さと儚さ、その瞬間を迎える時に、それまでの貴重な時間のうち、どれだけ真剣に向き合えたかという振り返りから、生きていることは決して当たり前じゃないこと、身近にいてくれる人や動物たちの、存在の大きさや大切さについてあらためて考えることも必要かなと感じています。

亡くなる時つて一瞬なんです。失われる時がどれだけ一瞬なのかつていうことを知ると、生きることへの考え方や価値観がもつと、ツクリしたものになると思います。命の最後は一瞬ですが生きた時間はとても長くて尊いものです。だからこそ、生きていることの素晴らしさと命の大切さを知っていただきたいです。

「命」についてしっかり意識がフォーカスできていれば、飼育放棄や虐待などは起こらないのではないのでしょうか。

「命」は動物だけでなく人間も含めた全ての生き物に共通するかけがえの無いもので、その大切さについて深く考えることの重要さを活動を通して実感しています。

今飼っている人は、家族の一員として見送りつていふものが必ずある中で、最後まで家族の一員として過ごしてあげていただきたいです。その子はベツトではなく家族の一員であるというところ、その子のことを一番理解して、適正な環境を提供できるのは自分たちしかいないということをしつかりと自覚した上で、最後まで飼っていたきたいです。猫を飼おうとする時には、ペットとして家に迎え入れるんじゃないで家族の一員として家に迎え入れることを考えてもらえたらなつて思います。

Q.メンバーのみなさんそれぞれの、参加のきっかけや活動して思うことを聞かせてください。



Profile

にゃんこおたすけ隊
代表
鎌田 優花さん

実は自分が直接誘ったメンバーはそんなに多くないんです。

みんなの方から興味を持って来てくれ、何かできることがあれば手伝うよと言ってきて、それをきっかけに継続的な活動を行ってくれるようになったメンバーが多いです。

家族は今でも活動について「協力はするけど賛成はしていないよ」というスタンスなのですが、活動の意義は理解してくれていると思います。

大変なことも多いけど、大きなやり甲斐のある活動だという実感があります。

生きる力になった、学生がこんなに頑張ってるんだから自分ももっと頑張ろうといったお声をいただくこともよくあるのですが、私たちが動物を守り助けているというより、私たちの方こそ支えられ救われていると強く感じています。



Profile

にゃんこおたすけ隊 副代表
酒井 理沙さん

小学生の頃から動物に関わるボランティア活動をしたいという思いを持っていました。その気持ちを持ったまま成長し、代表に誘われたのがきっかけで活動を始めました。

手探りながらも自分がやりたいと思い続けていたことができていること、その場を与えてくれ夢を叶えてくれた代表に感謝しています。今後、ペット防災についても広く周知されることを願って日々活動していきたいです。



Profile

にゃんこおたすけ隊
伊田 祐姫乃さん

動物を飼ったり関わるのがなかった環境でしたが、小さなイベント活動から参加するようになりました。

自宅で保護猫預かりもしているのですが、最初は人間を怖がって懐くのに時間がかかりますが、お世話をしていくうちに心を開いてくれる、この過程に喜びを感じます。

預かっていた猫ちゃんをFIP(猫伝染性腹膜炎)で亡くしたことがあるのですが、命の尊さをあらためて感じる機会になり、悲しみもその後の活動の糧になっていると思います。



Profile

にゃんこおたすけ隊
高橋 芽愛さん

ボランティア活動に興味があったものの、一步踏み出す勇気がなかなか出なかった時に代表と出会いました。彼女の話を知っているうちに、何かできることがあるんじゃないかという思いから参加を決めました。

家族の協力もあり預かりができるので、そこで命について深く考える時間を持っているなと感じています。



Profile

にゃんこおたすけ隊
大西 采音さん

ボランティア活動をするのは高校生には難しいのではないかと考えていたのですが、「高校生だから出来ること」がこの団体のモットーだと知り、やってみようと思いました。

初めての預かりとなった保護猫に愛着が芽生え、両親ともよく話し合った上でそのまま自分が里親になる決意し、今は自宅で飼っています。今は元気で人間よりは短命な猫のことを思うとき、命と向き合っている実感があります。



Profile

にゃんこおたすけ隊
和田 華明さん

代表の考えに共感し、少しでもチカラになればと思う団体に参加しました。

家でウサギを飼っているので保護猫を預かることはできませんが、譲渡が決まり幸せな結末に触れた時には嬉しくなるし、助けられる命があるならこれからも積極的に携わっていききたいです。



Profile

にゃんこおたすけ隊
米澤 彩花さん

ももとはは殺処分も含め知らないことばかりでした。話を聞いたり調べていくうちに、その残酷さを知り活動の意義を感じ積極的な参加を決意しました。

TNR活動を行う中で目にする、怯えたり不安そうな様子の猫ちゃんが、譲渡先で幸せそうな表情に変わっていく姿を見ると心から良かったなと思いますし、そこにやりがいを感じています。